国語科

今年度、３年古典探究では教材として、紫式部『源氏物語』の「光る君の誕生」を扱った。

〈源氏物語について〉

『源氏物語』は、『源氏物語』は、平安時代の紫式部が書いた世界最古の長編小説で、主人公光源氏（ひかるげんじ）の誕生から晩年、そしてその子孫の物語を、恋愛遍歴、宮廷の政治、仏教思想（因果応報、人生の無常観）を交えながら描く壮大な物語である。輝くような美貌と才能を持つ光源氏が亡き母の面影を求め、数々の女性と恋を重ねながら栄華を極める一方、苦悩も深め、最後は失意のうちに亡くなり、その後は息子の薫たちへと続く全 54 帖の三部構成の物語です。国語教材として取り上げられ、以降、70 年余に渡って各社の教科書に採録されてきた、いわば定番教材であり、そのため、人口に膾炙した作品となっている。

〈作者について〉

紫式部（むらさき しきぶ）は、平安時代中期の女房、作家、歌人。『源氏物語』の作者とされ、『紫式部日記』を残しており、歌人として『紫式部集』を残した。『後拾遺和歌集』などに入集し、『中古三十六歌仙』『女房三十六歌仙』『百人一首』に選ばれている。後に一条天皇の中宮彰子に出仕する。

〈授業展開について〉

本文の読解に関わる古文単語、文法事項、敬語表現を基にして、桐壺の更衣を取り巻く人々の感情や、宮中の人間関係を的確に読み取れるように主語を補いながら現代語訳を考えさせることを通して、本文の内容を把握させた。また、「一の 皇子（弘徽殿の女御の子（朱雀帝））」と「玉の男皇子（光の君）」それぞれに対する帝の想いを比較させ、皇子達それぞれの後ろ盾を含めた人間関係も把握できるように配慮しながら読解を進めた。

〈授業を終えて〉

源氏物語は主語の省略されている部分が多く、そのために生徒たちは「誰が何をしているのか分からない」となることが多かった。またわかりづらい単語や敬語表現が多く難易度は高いようだった。特に取り扱った「光る君の誕生」は壮大な物語の最初の説明ばかりで物語に動きがないため、文脈判断が難しいようであった。そのために、まずは文章をよく読んで簡単なあらすじをつかめるようになることが大切であると感じた。